令和６年度第２次
連合教職大学院
入学試験問題

［高度教職開発専攻］

小論文

注　意

１．試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見ないこと。

２．解答は，すべて別紙解答用紙の所定欄に記入すること。

３．すべての解答用紙に，受験番号及び氏名を明確に記入すること。

４．試験終了後，この問題冊子及び下書用紙は，持ち帰ること。

高度教職開発専攻	科目名	小論文

問一　次の文章を読み、筆者の主張について簡潔にまとめた上で、「命の教育」における子どもの主体性について、あなたの考えを述べなさい。（横書き 八〇〇字以内）

問二　この文章に題名をつけるとすれば、あなたはどんな題名をつけますか。五字～二〇字以内でつけなさい。（横書き）

教室でハムスターを飼っていたときのことです。土日、祝日、そして長期休業の折には、子どもがもち回りで自宅にもち帰ってお世話をしていました（本人を含め、同居家族に動物アレルギーがある場合は対象外とします）。いわゆる動物の「ホームステイ」とも言うべき取組で、子どもたちは自分の順番が来るのを楽しみにしていました。

そんな冬休み中のことです。Dさんから「ミント（ハムスターの名前）の様子がおかしくなった」と電話連絡が入りました。昨日の夜まで元気だったらしいのですが、朝になったらぐったりしていてあまり動かないというのです。さっそく、かかりつけの獣医に連絡をとり、診察を受けることにしました。

ところが、Dさんと私が電車で病院に向かう途中、ミントは死んでしまいました。獣医は、死因について調べるためには解剖しなければならないと言います。〝どうする？〟という表情でDさんの顔を見ると、こっくりとうなずきました。

理科の教科書から動物の解剖が姿を消して久しいのですが、解剖すること自体が命の教育になることはありません。子どもが大切に育ててきたペットの「命」が消えてしまったその原因を知りたいと思ったときにはじめて、解剖という行為がその子にとって重要な意味をもつのだと思います。

解剖の結果、死因は低体温によるものでした。寒さが原因だったのです。その事実にショックを受けたDさんは、病院から帰る途中ぽつりとつぶやきました。

「ハムスターを飼うのは、少し休みたい」

日ごろのお世話はもちろん、その動物の死を受け止めることも含めて「飼育」です。その責任・重さというものは、本来であれば動物に十分に触れ合う過程を通して、子どもたちの心のなかに少しずつ芽生えていくことが望ましいように思います。

しかし、相手は生き物です。こちらの都合に合わせて死を迎えてくれるはずはありません。まして今回は、飼育しはじめて早々に死んでしまったこともあり、Dさんの心の傷がどれほどのものだったかと思うと、私自身の心も沈んでしまいました。

そこで私は、もう一度出発点にもどって考えてみることにしました。「学校や学級で動物を飼育するというのは、飼育の過程で生じる問題を子どもたち自身が解決することに価値があると判断したからではなかったか」と。「死」というあまりに悲しくショッキングな出来事があっても、そこから「子どもたちが学べることは何か」「学ぶためには何をすればよいのか」を考えるべきだと思いました。

それに、ここで飼育活動を打ち切ってしまえば、この子だけでなく他の子どもたちにとっても、学びどころか「いやな思い出」としか記憶されないにちがいありません。飼育活動を

続けるなかで、何らかの形で子どもたちが成功経験を積み重ねられるようにすることこそが、動物飼育を教室内にもちこんだ教師である私の責任でもあるように思えたのです。

冬休みが終わり、Dさんたちの飼育グループは、これからもハムスターの飼育を続けるかについて話し合いをもつことになりました。その結果、「今度は寒さに強いモルモットを飼いたい」と私に提案してきました。〝さて、どうしたものか〟と思った私は、子どもたちの提案をいったん保留にしたのですが、次の日のDさんの日記にこんなことが書かれていました。

モルモットの話をお母さんとしていた。
「どうしてモルモットにしたの？」
と聞かれて、ぼくはこう言った。
「モルモットは寒さに強いから、死ぬことはないと思うから」
そしたらお母さんがこう言った。
「じゃあ、寒さに強い動物だから夜の寒さは気にしなくていいのね」
そう言われて、それはちがうと思った。
モルモットはハムスターより体も大きいし、寒さにも強いけど、命は同じ。そして飼われている動物の命を守るのは飼い主だってことを、ミントは教えてくれたんだな。

母親の言葉でDさんは思い直し、ハムスターの飼育にもう一度挑戦することを飼育グループに再提案しました。飼い主として「命を守る」ことの責任の重さと意味が、Dさんの心にストンと落ちたのだと思います。悲しみに終わらせず、ミントの死を次の活動に生かそうとする主体性を引き出した母親の対応は、見事としか言いようがありません。教師として、頭が下がる思いでした。

死んでしまったミントは、お墓をつくって中庭に埋葬しました。数日後、お墓の様子を見に行ってみると、花が供えられ卒塔婆のようなものが立てられていました。風で倒れても、数日後にはちゃんともとにもどっています。餌だったヒマワリの種がまかれ、お墓の周りにはヒマワリの花が咲きました。そして、ミントが死んでから1年以上たっても、子どもたちが墓そうじをしている姿をときどき見かけました。

ペットである動物が死に、たとえ目の前からいなくなっても、その「命」は内なる心で脈々と生き続けているかのようでした。一つの命が消えたとき、私たちは、信念と化した「内なる命」の存在、その大きさを自覚できるのかもしれません。

死を乗り越えようとする子どもの「主体性」は、決して弱いものではないことを、私は子どもから学んだような気がします。

佐々木昭弘『最高の主体性を発揮する子どもと教師』((2023.1 東洋館出版社より)